「ノモンハン事件」メモ

●これほど悲惨で、出鱈目な戦いはなかった

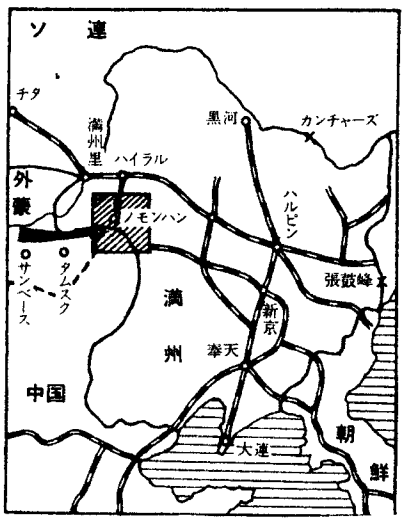
▽昭和14年5月から 8月にかけて
　満州西北部 ノモンハンでの
　外モンゴル人民共和国(外蒙)との 国境紛争

▽何人 死んだのか
　諸説あって
　　はっきりしない

▽防衛研修所戦史室の
　第6軍軍医部調査
　動員兵力 6万のうち
　　損耗率は 33%

▽主力の第23師団では
　損耗率 実に 76%

▽世界戦史にも
　類を見ない
　日本陸軍 始まって以来の 大敗だった



●何で、こんなに負けたのか

▽ソ連軍の 圧倒的な火力と
　戦車 装甲車を中心とした 機動力との違い

▽重砲で どかどか撃たれ こっちが 1発撃つと
　たちまち 1分間に 120発も撃ち返され
　兵隊たちは 砲兵に「なるべく撃たないでくれ」

根上博主計少尉の話

「とにかく、前にも後ろにも、戦車が10㍍か20㍍のところを、ガーガー走り回る。こっちは肉弾攻撃しかない。アンパンと言って、携帯地雷を抱えて飛び込んで行く。サイダー壜にガソリンを詰めて、投げ付ける。思う存分蹂躙されたところを重砲で叩かれ、負けたとしか言い様のないほど悲惨な光景でした」

戦車が横一線になって、砲塔から火炎放射器を噴射しながらやって来る。日本軍陣地に重油を撒き、その上から火をかぶせる。戦車に踏み潰されなかった者は、火炎放射で焼かれる。「機関銃弾も撃ち尽くして、戦術も何もあったものじゃなかった」

第6軍軍医部調査

戦死及び生死不明8,741 戦傷8,664 戦病2,363 計19,768人

主力となって戦った第23師団では、出動人員15,975人に対し12,230人と10人のうち7人以上が死傷している。

根上　博(ねがみ・ひろし)

大正1(1912)～没年不詳　北海道生まれ。昭和11年立教大卒。同年8月、ベルリン・オリンピック400㍍自由形で入賞。12年入営、主計少尉としてノモンハンに従軍。16年再び応召、ビルマ・タイ国境で終戦を迎えた。戦後は勝村建設経理部長

戦闘が如何に熾烈だったか

第一線指揮官で、包囲されて戦死あるいは自決した者10人、無断撤退の責任を問われ自決させられた者3人。

東 八百蔵中佐 捜索第23連隊長 5月29日戦死
吉丸 清武大佐 戦車第3連隊長 7月3日戦死
大内 孜大佐 第23師団参謀長 7月4日戦死
森田 徹大佐 歩兵第71連隊長 8月26日包囲され自決
染谷 義雄中佐 穆稜重砲兵連隊長 8月26日包囲され自決
近藤虎之助少佐 野戦重砲第7連隊長代理 8月26日戦死
梅田 恭三少佐 野戦重砲第1連隊長代理 8月27日包囲自決
長谷部理叡大佐 第8国境守備隊第2地区隊長
　8月28日後退の責任を問われ自決
山県 武光大佐 歩兵第64連隊長 8月29日連隊旗焼き自決
伊勢 高秀大佐 野砲第13連隊長 8月29日戦死
東 宗治中佐 歩兵第71連隊長代理 8月30日戦死
井置 栄一中佐 捜索第23連隊長 9月16日陣地放棄で自決
酒井美喜雄大佐 歩兵第72連隊長
　9月25日負傷入院中自決させられる

物量で押してくる戦車群に対し、一番活躍したのが原始的な火炎壜。素手で戦ったも同然だった。

●一番問題なのは、国家的意志とは全く関係なく、現地関東軍参謀の独走によって行なわれたこと

▽「陸軍あって、国家なし」の 時代だが
　統帥権を握っている 参謀本部でさえ
　　関東軍の 事件拡大の動きを 知らなかった

▽軍事行動を広げた後で 事後報告をする
　関東軍の 完全な 独断専行だった

▽参謀たちは 後で
　「まさかソ連が、あのような大兵力をあの草原に
　　展開出来るとは、夢にも思わなかった」

▽自己過信から来る 情勢判断の甘さ
　敵を知らず 己れを知らず
　近代装備の ソ連軍の実力を 侮っていた

▽兵隊には 武器弾薬も ろくに与えずに
　「必勝の信念」のみを 要求した

●司馬遼太郎さんに、書いて欲しかった

▽司馬さんは 文芸春秋の巻頭随筆
　「この国のかたち」(平成2年3月)に
　「ついに書くことはないだろうと思うが、ノモンハン事変をここ十六、七年来しらべてきた。生き残りの人達にも、ずいぶん会ってきた」

▽免職になった 元連隊長は
　第7師団(旭川)歩兵第26連隊長 須見新一郎大佐

司馬さんは、なぜ書かなかったのか

「ちゃんとした統治能力をもった国なら、泥沼におちいった日中戦争の最中に、ソ連を相手にノモンハン事変をやるはずもないし、しかも事変のわずか二年後に同じ『元亀天正の装備』のままアメリカを相手に太平洋戦争をやるだろうか。信長ならやらないし、信長でなくても中小企業のオヤジさんでさえ、このような会社運営をやるはずもない」

「自分が生存した昭和前期の国家が何であったかが、四十年考え続けてもよくわからない。よくわからぬままに、その国家の行為だったノモンハン事変が書けるはずもない」

●日本陸軍に、重大な反省を促す「天の啓示」だった

ノモンハン事件については

五味川 純平「ノモンハン」
(昭和50年6月 文芸春秋)

伊藤 桂一「静かなノモンハン」
(昭和58年2月 講談社)

半藤 一利「ノモンハンの夏」
(平成10年4月 文芸春秋)

田中 克彦「ノモンハン戦争」
(平成21年6月 岩波新書)

五味川　純平(ごみかわ・じゅんぺい)

大正5(1916)～平成7(1995)中国大連生まれ。本名は栗田茂。東京外語英文科を卒業。昭和18年応召で満ソ国境に配属。31年自らの体験に基づく「人間の条件」を発表、「戦争と人間」「ガダルカナル」など、戦争文学の著作で53年菊地寛賞

「この国のかたち」から

戦場で生き残って、そのあと免職になった一連隊長を信州の盆地の温泉町に訪ねたときは、まだ血が流れつづけている人間を見た思いがした。その話は、事実関係においては凄惨で、述懐においては怨嗟に満ちていた。うらみはすべて、参謀という魔法の杖のもちぬしにむけられていた。他者からみれば無限にちかい権能をもちつつ何の責任もとらされず、とりもしないというこの存在に対して、しばしば悪魔！ とよんで絶句された。

「元亀天正」という形容を、この元大佐は使われた。当時の日本陸軍の装備についてである。いうまでもなく元亀天正とは、織田信長の活躍の時代のことである。この元大佐とその部下たちはその程度の装備をもってソ連の近代陸軍と対戦させられ、結果として敗れた。その責任は生き残った何人かの部隊長にかぶせられ、自殺させられた人もあった。しかしこの悲惨な敗北のあと、企

▽昭和の陸軍が 初めて経験した 本格的近代戦
戦闘組織としての欠陥を 余すところなく暴露
大敗したのだから 貴重な教訓になるはず

内大臣湯浅倉平の言葉

兵驕るものは敗る。あまり驕慢をきわめた結果、この大敗あり。わが国のためには非常に打撃なれども、大局の上にはよき教訓を得たるものり。

陸軍は厳重な箝口令、敗戦をひた隠しに

第26連隊小野寺哲也衛生伍長は、衛生兵としては第7師団でただ一人、武功抜群で金鵄勲章を受けたが、その直後、3日間営倉入り。戦死した戦友の実家へ出した手紙が、「悲惨な状態を知らせた」と、憲兵の検閲に引っ掛かった。
「ノモンハン帰りは内地に帰すな」暗黙の指示が出され、兵隊の内地帰還を遅らせるため、関東軍の様々な部署に転属させたという。

▽五味川さんは「ノモンハンで大変な苦戦をしたらしいとう噂は、どこからともなく聞こえてきた」
▽ほとんどの国民は 戦争が終わるまで
これほどの敗戦は 知らなかったのでは…
▽新聞には連日
陸軍航空
部隊の活躍
▽東宝が
陸軍省の
全面協力で
製作した
航空戦
スペクタクル映画「燃ゆる大空」(15年9月封切り)

「燃ゆる大空」

作詞 佐藤惣之助 作曲 山田耕作

燃ゆる大空 気流だ 雲だ
騰るぞ翔るぞ 迅風(はやて)の如く
爆音正しく 高度を持して
輝くつばさよ 光華(ひかり)を勢え
航空日本の 空ゆくわれら

●敗因にメスを入れることもなく、太平洋戦争に
▽ガダルカナル インパール サイパン レイテと
至る所で ノモンハンの二の舞 三の舞
▽陸軍が 戦力と考えたのは 兵隊の頭数だけ
武器 弾薬 補給の配慮は ないに等しかった
▽ノモンハン事件 最大の失敗は
2万人の犠牲による教訓が 生かされなかった

画者であり演出者であった「魔法使い」たちは転任させられただけだった。たとえば、ノモンハンの首謀者だった少佐参謀の辻政信は上海に転任し、その後、太平洋戦争では大きく起用されてシンガポール作戦の参謀になった。作戦終了後、その魔法の機能によって華僑の大虐殺をやり、世界史に対する日本の負い目をつくることになる。

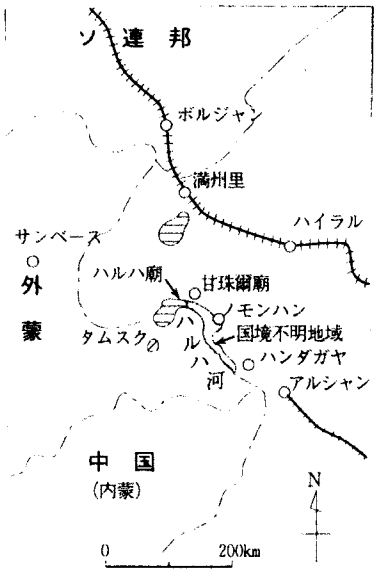
須見 新一郎(すみ・しんいちろう)
明治25(1892)～没年不詳 長野県生まれ。陸軍大佐。第1師団参謀、黒河・綏芬河各特務機関長、東京連隊区司令官歴任。昭和14年第7師団第26連隊長となり、ノモンハンで戦う。同年12月予備役。戦後は上山田温泉で旅館「三楽荘」を経営

辻 政信(つじ・まさのぶ)
明治35(1902)～昭和43(1968)石川県生まれ。陸軍大佐。昭和12年関東軍参謀となり、ノモンハン事件で強硬論主張。16年第25軍参謀、17年参謀本部作戦班長。マレー上陸作戦、シンガポール、ガダルカナル作戦を担当。華僑大虐殺、バターン死の行進も、辻の発案と言われる。第18方面軍参謀としてバンコクで敗戦を迎えたが、戦犯指名を恐れ、僧侶に変装して逃亡を続け23年帰国。逃走記録「潜行三千里」はベストセラー。27年衆院議員、34年参院議員。36年東南アジア視察中、ラオスで消息を断ち、43年死亡宣告

湯浅 倉平(ゆあさ・くらへい)
明治7(1874)～昭和15(1940) 山口県生まれ。岡山、静岡県知事を経て大正12年警視総監。内務次官、会計検査院長を歴任し、昭和8年宮内大臣。11年二・二六事件後に内大臣となり天皇側近随一の硬骨漢として軍部の無理押しに抵抗した

●ノモンハンとは？

国境不明確地帯



果てしなく続く、広漠とした砂地と草原の波状地。草原はどこもかしこも見通しで、目標物としては、東から北へ流れやがて黒龍江となる川幅50㍍、水深1㍍のハルハ河があるだけ。

蒙古人が「ノモンハン」と呼ぶ所は、集落があるわけでなく、時々遊牧民がやって来て、「パオ(包)」というフェルト張り組み立て式の饅頭型住居を作っている寂しい場所だった。

西北方面担当の第23師団は、ノモンハン北東200㌔のハイラルに師団司令部を置いていた。

満州国はハルハ河を国境線とし、河から右岸を満州領としたが、外蒙側は清朝の時代、遊牧民の牧草地の争いを防ぐためハルハ河から東に13㌔ほど入った所(満州領内)に境界があったと主張。外蒙軍も馬に草を食べさせに来ていた。

▽人が 住んでいるわけでもなく
　国境線が 少々ずれたって 大勢に影響はない
　国家の威信をかけ 戦争する場所ではなかった

●ノモンハン事件に発展させたのは、関東軍の火遊び

▽中国戦線の部隊は 手柄を立てているのに
　精鋭を誇る関東軍は 暇だった

▽作戦参謀 辻政信少佐が 関東軍にいなかったら
　ノモンハン事件は 恐らく 起こらなかったろう

▽その評価となると 真っ二つに分かれる

▽東条英機「将来国家の至宝となり得る人物」
　第11軍参謀長「協調性に欠け、自我が強烈で、将来中央の要職に絶対につけてはならない」
　南条範夫「自信過剰で自己顕示欲旺盛。私は、この男は間違いなく一種の精神異常者だと考えた」

波瀾万丈の人生の辻

山中温泉(石川県)近くで、3反ほどの畑を耕し炭焼きで生計を立てている貧農の長男として生まれたが秀才だった。あの時代、貧しい家の子が世の中に出て行くには官費の学校、陸士、幼年学校、海兵に入り軍人になるか、師範学校を出て教師になるか。

辻は名古屋の幼年学校、陸士を首席で卒業、陸大も3番で恩賜の軍刀を受けている。昭和7年の上海事変に金沢の第9師団歩兵第7連隊中隊長として出征。先頭に立って軍刀を揮い、負傷して「勇猛果敢な中隊長」の勇名を馳せた。その年末参謀本部勤務になり、辣腕を謳われた幕僚生活が始まる。

東条　英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。関東軍憲兵司令官を経て昭和12年同参謀長。13年陸軍次官。15年第2次近衛内閣陸相となり、日米交渉で中国撤兵に反対。16年10月首相に就任、陸相、内相を兼務し、対米英開戦の最高責任者に。憲兵政治、翼賛選挙により独裁体制を固めた。戦局悪化、19年に参謀総長を兼務するも、サイパン陥落で7月総辞職。戦後ピストル自決を図り未遂。A級戦犯として絞首刑になった

南条　範夫(なんじょう・のりお)

明治41(1908)～平成16(2004)東京生まれ。国学院大教授、経済学者として活躍するかたわら、40歳を過ぎて小説執筆。昭和31年「燈台鬼」で直木賞、57年「細香日記」で吉川英治文学賞を受賞

盧溝橋事件(昭和12年7月7日)**の辻**

関東軍参謀の辻は北京に飛び、現地連隊長に「関東軍が応援します。思う存分やって下さい」とけしかけた。天

▽内にあっては 常に 積極論で
参謀部内の議論を リードする
外に出ては 命令系統を無視し
上級司令部の権威を笠に着て「幕僚統帥」

●37歳、一介の少佐の辻が、「影の関東軍司令官」
▽上海事変当時の 人間関係が 大きかった
・関東軍司令官 植田謙吉大将…第9師団長
・ 〃 参謀長 磯谷廉介中将…第7連隊長
・ 参謀副長 矢野音三郎少将…7連隊将校団先輩
▽3人とも 辻を可愛がり 信頼も絶大だった

磯谷は「なぜ辻を信頼したか」
「積極果敢なところが気に入った」と答え「間違っていたかなあ」と、首をかしげていた。

▽高級参謀(作戦課長) 寺田雅雄大佐
作戦主任 服部卓四郎中佐は 着任したばかり
昭和11年4月から 二度も 関東軍参謀をやり
強気の辻が 関東軍を引っ張って行くことに

●武力衝突の引き金は、「満ソ国境紛争処理要綱」
▽辻が作成し 昭和14年4月25日
軍司令官師団長会同で 要綱を示達したが
国境確保の強い意志を示す 攻撃的な内容

ソ連との国境紛争が年々増えていた
12年113回、13年166回。参謀本部としては、泥沼化する支那事変処理に手一杯。満州では、ソ連と事を構えたくなかった。関東軍にも、小さな紛争など問題にせず対ソ作戦の備えに専念させたい考えだった。ところが、実際に紛争が発生した時、どんな場合に兵力を使うか、またどの程度使ったらいいのか — 具体的な方針が関東軍に示されず、曖昧なままだった。ここに、辻の強硬な処理要綱が登場し、関東軍の暴走に付け込まれるスキがあった。

「満ソ国境紛争処理要綱」
「軍ハ侵サス侵サシメサルヲ満州防衛ノ根本基調トス」としながらも「之カ為『ソ』国境ニ於ケル『ソ』軍(外蒙軍ヲ含ム)ノ不法行為ニ対シ

津の支那駐屯軍司令部を訪ね、「関東軍は明日爆撃機で盧溝橋付近の支那軍を爆撃します。私が戦闘機に乗って行きます」参謀の池田純久中佐が「本気か」「本気ですとも。中央がグズグスしているから独断でやります」池田が「関東軍の爆撃機は、我々の戦闘機で全て叩き落としてやる。責任は俺が取る」渋々断念したという。

池田 純久(いけだ・すみひさ)
明治27(1894)～昭和43(1968)大分県生まれ。陸軍中将。昭和10年支那駐屯軍参謀。企画院調査官、関東軍参謀副長などを経て昭和20年内閣綜合計画局長官

植田 謙吉(うえだ・けんきち)
明治8(1875)～昭和37(1962) 大阪生まれ。陸軍大将。昭和5年第9師団長(金沢)となり、7年の上海事変に出動。参謀次長、朝鮮軍司令官歴任。11年関東軍司令官。ノモンハン事件で事件途中に予備役

磯谷 廉介(いそがい・れんすけ)
明治16(1883)～昭和42(1967)兵庫県生まれ。陸軍中将。歩兵第7連隊長、中国駐在武官、第10師団長歴任。昭和13年関東軍参謀長。ノモンハン敗北で更迭、15年予備役。太平洋戦争中に召集され、17年香港総督。A級戦犯で終身刑、27年釈放

服部 卓四郎(はっとり・たくしろう)
明治34(1901)～昭和35(1960)山形県生まれ。陸軍大佐。昭和14年関東軍作戦主任参謀。ノモンハン敗戦で9月歩兵学校教官。15年参謀本部作戦課作戦班長。16年7月作戦課長。17年陸相秘書官に転出するも、18年10月再び作戦課長になり、陸軍主要作戦を指導。戦後、復員局資料整理課長として戦史資料整理に当たる

テハ周到ナル準備ノ下ニ徹底的ニ之ヲ膺懲シ『ソ』軍ヲ慴伏セシメ其ノ野望ヲ初動ニ於テ封殺破摧ス」特に問題なのは

要領③「之ヲ急襲殲滅ス右目的ヲ達成スル為一時的ニ『ソ』領ニ侵入シ又ハ『ソ』兵ヲ満領内ニ誘致滞留セシムルコトヲ得」

要領④「国境明確ナラサル地域ニ於テハ防衛司令官ニ於テ自主的ニ国境線ヲ認定シテ之ヲ第一線部隊ニ明示シ無用ノ紛争惹起ヲ防止スルト共ニ第一線ノ任務達成ヲ容易ナラシム」

要領⑦「断固トシテ積極果敢ニ行動シ其ノ結果生スヘキ事態ノ収拾処理ニ関シテハ上級司令部ニ信倚シ安ンシテ唯第一線現場ニ於ケル必勝ニ専念シ万全ヲ期ス」

▽ソ連領への越境を認め 防衛司令官に 国境認定権
▽これでは 国境紛争を奨励し
「どしどし武力解決」と 言っているようなもの

●植田軍司令官の一言が、紛争をエスカレート
▽多田駿中将(第3軍司令官)が「お示しどおりにやると、あるいは思わざる結果を起こすかも知れない。少し考慮の余地を与えられたい」
▽植田は「それはこの植田が処理するから、第一線の方々は何ら心配することなく、断固として侵入者を撃退されたい」関東軍に 紛争の場合「すぐ武力出動」の決意を 固めさせることに

●辻の強硬方針の背景には、二つの国境紛争

カンチャーズ島事件

昭和12年6月19日、黒龍江中洲の小さな島、カンチャーズ島(満州領)にソ連国境警備隊が上陸、占領した。ソ連は外交交渉で兵力引き揚げに同意したが、30日になるとソ連砲艦3隻が関東軍部隊を砲撃、日本側も応射して1隻を撃沈、1隻を大破。日本の抗議に7月5日撤兵した。

▽関東軍参謀に「とにかく一撃することだ。外交交渉より、武力処理の方が即効的だ」
▽露骨な国境侵犯には スターリンの「血の粛清」

多田 駿(ただ・はやお)

明治15(1882)～昭和23(1948)宮城県生まれ。陸軍大将。支那駐屯軍司令官を経て昭和12年参謀次長。13年1月支那事変の和平交渉打切りに反対、政府、杉山陸相と対立した。14年第3軍司令官となり16年北支那方面軍司令官で予備役

参謀本部の態度も問題だった

関東軍が要綱を報告したのに、何ら明確な指示をしなかった。満ソ国境の紛争を望まないなら、「紛争が起きたら、まず中央に報告し指示を仰げ」とブレーキをかけるべきだった。

関東軍は、中央で認められたものと受け取り、中央統制が乱れる原因に。

グルー大使の報告

日本の態度を考慮するに際しては、本国政府と出先軍部との間に著しき懸隔の存在する事実を常に留意するを要す。日本を相手とするに当り、吾人は実際隠れたる二個の政権を相手としつつありて、彼等の明白なる目標は、外国権益の駆逐及び支那市場の占有に在り。

(昭和13年10月28日 国務長官宛打電 日本側盗聴)

グルー(Joseph Clark Grew)

1880～1965 アメリカの外交官。トルコ大使を経て昭和7年駐日大使。日米関係改善に努力し、開戦で帰国。国務省極東局長、国務次官、国務長官代理を歴任し天皇制存続に尽力。著に「滞日十年」

スターリン(Iosif V. Stalin)

1879～1953 ソ連共産党書記長。大量粛清で個人独裁を確立。昭和11年、人民委員会議議長(首相)となり、対独戦を指導。死後、専制支配を批判された

▽トハチェフスキー参謀総長ら 赤軍最高幹部が
6月12日 軍律違反で 銃殺刑にされ
動揺する国内の目を 満ソ国境の緊張に
▽昭和13年6月13日には 秘密警察(エヌ・カー・ヴェー・デー)
極東長官リシュコフ(三等政治大将)が
東満州の琿春(こんしゅん)を越えて 亡命してきた

張鼓峰事件

日本側の出方を探る狙いがあったのか、ソ連軍が7月11日、満州南東部の豆満江上流20キロの張鼓峰に進出し、陣地構築を始めた。参謀本部は不法越境として朝鮮軍第19師団に出動を命じたが、武力行使については、漢口作戦を準備中であり、天皇の裁可も得られる見込みがないことから、武力発動はしない方針だった。

睨み合いが続く中、尾高(すえたか)亀蔵第19師団長が30日夜、独断でソ連軍を攻撃、ソ連側も戦車、航空機を繰り出して5日間にわたる激戦となった。8月11日、モスクワで停戦協定が成立、第19師団は戦死526人を出して撤収した。

▽結果的に 張鼓峰一帯が ソ連領になり
辻は「こんなざまでは関東軍にもすぐ跳ね返ってくる。ソ連になめられないためにも、越境には即座に一撃することだ」強硬方針を取ることに

●辻たち関東軍参謀は、「森を見て山を見ず」
▽ソ連の「外蒙支配強化」を 見落としていた
▽支那事変が始まると、外蒙でも「粛清の嵐」
親ソ派 チョイバルサン元帥が 実権を握り
政府 軍の幹部を「反ソ、日本の手先」と
一斉逮捕し 2万人が 処刑されたという
▽ソ連は 昭和12年9月4日 第57特別狙撃軍団を
ウランバートル(外蒙の首都)に 進駐させた
狙撃1個師団 戦車4個旅団 飛行機1個旅団を
満州国境付近に 集中配備

●昭和14年に入ると、ノモンハン付近の紛争激化
▽外蒙兵13人が 満州国軍の捕虜になると
チョイバルサンは 1月27日
「武力侵犯を壊滅せよ」と命令 兵力を増強

トハチェフスキー(M. Tukhachevskii)
1893～1937 ソ連軍参謀総長。昭和10年元帥となるが銃殺刑に。36年名誉回復

ニューヨーク・タイムズ社説

(昭和12年7月1日)モスクワ政府は各方面における今日の混乱から脱出し、動揺しつつあるソ連政府の崩壊を食い止めるために、今回の事件(カンチャーズ島事件)を内心において歓迎しているかもしれない。即ち国民の不安を一掃し、国民に挙国一致の国防を強制するため、今回の事件を利用するであろう。

リシュコフの亡命

昭和12年7月に37歳で秘密警察極東長官に抜擢されたが、そのハバロフスク着任が前長官逮捕で始まったように、いつ粛清が自分に及ぶか、恐れた。管内視察に出た際「ちょっと先まで見てくる」と、副官を車に待たせたまま亡命した。東京移送後、17年に関東軍大連特務機関付に。20年8月8日、ソ連軍が侵攻してくると内情暴露を恐れた特務機関により処刑された。

ソ連と外蒙の関係

外蒙は大正10年独立宣言したが、中国は認めていなかった。これに対し、コミンテルン極東書記局は昭和4年「外蒙に定着した影響を維持する」を方針とし、援助を始めた。日本の満州支配に、ソ連は極東軍を増強したが、中でも注目したのが外蒙の戦略的価値。しかし、外蒙ではソ連型計画経済の強行とラマ教弾圧により反ソ暴動が起こり、内蒙へ逃亡者も続出した。スターリンは11年2月ゲンデン首相を「反ソ的」と追放すると3月12日に「ソ蒙相互援助協定」を結び、外蒙にソ連軍導入の下地を作った。

▽スターリンも 共産党大会(3月10日)で
「ソ連に対する如何なる侵略も、
二倍の反撃を以て応えられよう」と演説
▽参謀たちは 日露戦争勝利の栄光に 酔っていて
「突撃すれば逃げるのだ」ソ連の軍事基地も
満蒙国境から 700キロも離れていて
短期間大兵力集中は 出来ないと思っていた

●ノモンハン事件は、5月11日朝、満州国国境巡察隊が越境外蒙兵を撃退したことから始まった
▽12日には「再び700人越境」と報告(実際は50人足らず)
▽第23師団司令部(ハイラル)は 13日
「紛争処理要綱」徹底に 部隊長を集め会議中
▽小松原道太郎師団長(中将)は
東八百蔵中佐の師団捜索隊(2個中隊)を 出動させ
外蒙軍が左岸に撤退 捜索隊も引き揚げた
▽チョイバルサンは 外蒙騎兵師団と
ソ連第57特別狙撃軍団を ハルハ河右岸に
▽小松原は 21日 山県武光大佐(歩兵第64連隊長)指揮の
山県支隊(1300人)を 出動させた

●山県支隊の攻撃は、28日明け方から始まった
▽先頭を行く 東捜索隊が まずぶつかったのが
戦車 重砲と 強力な戦闘態勢のソ連軍
▽たちまち 敵中に孤立 山県支隊に応援要請
支隊は 猛烈な砲撃で 動くに動けなかった
▽東中佐は 無数の戦車に包囲され
29日夕 残った20数人を率いて突撃し 戦死
捜索隊だけで 半数以上 115人が戦死した

その頃、上級幹部は

小松原(師団長)は山県に「増援を送るから、敵の全滅を期せ」と命令、植田(関東軍司令官)も小松原に「ノモンハンにおける貴軍の赫々たる戦果を慶祝す」との祝電を打ってきた。

▽30日になると ソ・蒙軍が 左岸に撤退
山県支隊も 遺体を収容 第1次戦闘は終わった
▽日本側は 国境線を一応確保 一件落着と考えた
辻も 来訪した参謀本部参謀に「もう、ノモンハンは終わりましたから、ご安心下さい」

チョイバルサン(喬巴山)
1895～1952 モンゴル人民共和国元帥。遊牧民の子に生まれイルクーツクで学んで革命思想の影響を受ける。帰国後、モンゴル人民革命党を組織、スターリンの信任を得て、昭和13年～27年首相

第23師団幹部は甘く見ていた

小松原はソ連駐在武官、参謀長大内孜(大佐)もラトビア武官をしてソ連通として知られていたが、「ソ連兵が姿を見せている」と、報告を受けていたのに、砲兵部隊を出動させず、大切な事前の敵情偵察もさせなかった。

日本軍に致命的な地形

ハルハ河の左岸(外蒙側)は急勾配に高くなっていて、右岸(満州側)より数10メートルから100メートルも高い台地になっていた。右岸数キロにわたり外蒙側から丸見えなのに、満州側からは全く見えない。
高台に重砲陣地を置いたソ連軍は、射的場の標的を狙い撃ちにするように、正確で猛烈な砲撃を加えてきた。

東八百蔵中佐の遺書

勢亥子へ 予ハ其許ノ御陰ニテ最モ幸福ニ人生ヲ送タリ 礼ヲ申ス
博子 直子 洋子 文子へ 皆々賢ク丈夫ニ女ラシク育チツツアル故父ハ気ニカカルコトナシ 姉妹カヲアワセ母ヲ大切ニシ立派ナ人ニナレヨ
手紙出スベキモ奥蒙古ナリ 之ヲ絶筆トシ靖国神社ニテ サラバ 父
(5月24日付で、軍隊用の通信紙に書かれていた)

ゾルゲ(Richard Sorge)
1895～1944 ドイツ人。ソ連共産党に入党、昭和5年上海で在中国諜報機関を組織。8年ソ連赤軍諜報員としてドイツの

●ゾルゲは6月4日、東京から極秘電報を打電した

ゾルゲの極秘電報

「日本がソ連との本格的戦争に走る見込みは少ない。にもかかわらず、関東軍の独走傾向が増大したため、大規模衝突の可能性はある。日本人、とくに日本軍とは、総じて鞭を使って初めて交渉を行なうことが出来る。衝突の続発を防止するためには、毅然とした、厳しい手段を用いるよう勧告する」

「最強の諜報機関」ゾルゲ機関

昭和5年ゾルゲが上海で諜報機関を組織したとき尾崎秀実(朝日上海特派員)も参加した。尾崎は近衛文麿が首相になると内閣嘱託として首相官邸の一室にデスクを構え、書記官長、秘書官室に自由に出入りし、高度な情報を入手できた。ゾルゲは昭和8年秋に来日したが、尾崎情報などでオットの絶大な信頼を得て大使館情報顧問となり、大使館の情報を全て握っていた。

▽ソ連は「ゾルゲ電報」のように 行動した
▽ジユーコフ中将(白ロシア軍管区司令官代理)を
　第57特別狙撃軍団長に任命 ノモンハンへ
▽ジューコフの行動は 迅速だった
　戦闘指揮所を タムスク(ノモンハンから120キロ)から
　ハルハ河最前線に進出させ 兵力増強を要請
▽スターリンは「攻者三倍の原則」
　「攻める側が、防ぐ側の三倍の兵力であれば
　必ず勝てる」兵法の原則に 忠実に従った

要請以上の大兵力、資材を緊急輸送した

自動車化狙撃1師団 狙撃2師団 自動車化1旅団 戦車2旅団 装甲車3旅団 砲兵4連隊 飛行2旅団　砲兵弾薬18,000トン 空軍弾薬6,500トン 糧食4,000トン 燃料15,000トン 貨物11,500トン

●情報が、なかったわけではなかった
▽ソ連大使館付陸軍武官 土居明夫大佐(のち中将)は
　6月中旬 シベリア鉄道経由で 帰国する時
　極東に送られる 重砲80門 大部隊を目撃した

新聞特派員の肩書で来日。オット少将の信任を得てドイツ大使館情報顧問となり、日本の対ソ政策情報を収集。16年10月検挙され、19年11月処刑された

尾崎　秀実(おざき・ほつみ)
明治34(1901)～昭和19(1944)東京生まれ。大正14年朝日新聞に入社し昭和4年上海特派員。7年近衛のブレーンである「昭和研究会」に入り、翌年朝日を退社。第1次近衛内閣嘱託、満鉄調査部嘱託を務めていたが、16年10月治安維持法・国防保安法・軍機保護法違反で逮捕され、19年死刑。獄中から英子夫人に243通の手紙を出し、21年「愛情はふる星のごとく」として出版され、ベストセラーに

近衛　文麿(このえ・ふみまろ)
明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。貴族院議長を経て昭和12年第1次内閣を組織。支那事変で13年「国民政府対手トセス」と声明し解決の道を塞ぐ。15年第2次内閣で大政翼賛会を結成、日独伊三国同盟締結。第3次内閣で日米交渉に努力したが総辞職。戦後、GHQから戦犯の出頭命令を受け服毒自殺

オット(Eugen Ott)
1889～1976　ドイツ陸軍少将。昭和9年駐日大使館付武官。13年大使となり、日独伊三国同盟を推進。ゾルゲ逮捕で、ゾルゲとの親交から17年に解職された

ジューコフ(Georgii Zhukov)
1896～1974 ソ連軍元帥。ノモンハン戦を指揮し、独ソ開戦時は参謀総長。対独戦勝利の軍司令官として国民的英雄に

日露戦争の軍人は慎重だった

児玉源太郎は常にロシア軍の3倍の兵力を用意した。それでもなお、負け

▽夜も寝ないで 追い越して行く 軍用列車を数え
関東軍司令部(新京)に立ち寄り 警告した

参謀たちは聞く耳を持たなかった

土居が「ソ連は極東に大機械化部隊を送っている。慎重にするように」辻は「ソ連軍の戦車を持って来て、戦勝祝賀観兵式をやろうと思っているんだ。余計なことを言うな」土居「ソ連の1個師団は、日本の何倍もの火力を持っているのを知らんのか」辻「関東軍はいま、一挙にソ連軍を撃滅する意気に溢れている。意欲に少しでも水を差すような消極論は禁物だ」

●第2次戦闘の始まりは、小松原師団長の緊急電報
▽6月19日 ソ連軍が 再びハルハ河に進出
「防衛の責任上、徹底的に膺懲したい」
▽寺田(高級参謀)「しばらく事態を静観したらどうか」
辻は「国境侵犯を繰り返させないためには、最初に痛撃を加えて関東軍の力を思い知らせる。関東軍の不言実行の決意を示すことだ」
服部(作戦主任参謀)も 辻を支持した
▽辻の作戦計画は 弱小の第23師団に代えて
精強で知られる 第7師団(旭川)を主力に
▽植田(軍司令官)は反対した「ノモンハンは小松原の担当正面だ。それを他の師団長に解決させるのは、小松原を信用しないことだ。自分が小松原だったら腹を切る」この一言で 第23師団主力に
▽第7師団から 歩兵第26連隊(須見大佐)を
小松原の指揮下に入れ 兵力1万5千
火砲120門 戦車67台で 攻撃することに

●関東軍の完全な独断専行だった
▽作戦会議では 磯谷(関東軍参謀長)が
「1個師団という戦略単位の軍を動かすのだから予め参謀本部の了解を得ておくとが必要だ」
辻は「越境ソ連軍を排撃することは、関東軍司令官の任務に属する。中央と打ち合わせていては戦機を逸する恐れがある」
▽6月20日「関東軍作戦命令」として
発令した後で 夕方になって 参謀本部に報告

る場合も想定し、その対策を立てた。昭和の軍人に細心さがなくなったのは、負けたことを知らない奢り。

児玉 源太郎(こだま・げんたろう)
嘉永5(1852)～明治39(1906) 山口県徳山生まれ。陸軍大将。台湾総督を経て明治33年陸相。36年参謀次長が急死、急遽後任となり日露開戦で満州軍総参謀長として陸軍主要作戦を立案・指導した。39年参謀総長に就任したが急逝した

「三単位師団」の第23師団

第3次国防方針改訂(昭和11年6月8日)で、ソ連、米国を仮想敵国とし、陸軍は平時17個師団を27個師団にすることにしたが、容易なことではなかった。そこで従来1個師団4個連隊編成だったものを3個連隊編成に間引きして、師団の数を増やすことにした。
第23師団は「三単位師団」として1年前編成されたばかり。連隊が減れば、砲兵などの特科部隊も縮小し大砲は旧式な三八式野砲(明治38年採用)。兵隊の大部分は新しく補充された初年兵と2年兵。満州に渡ってからも半年は専ら耐寒訓練中心、ろくに戦闘訓練もしないうちにノモンハン事件に。

中央では反対論が続出した

中でも陸軍省軍事課は「大して意味のない紛争に大兵力を投ずる必要があるのか。外交交渉で解決すべきだ」しかし板垣征四郎(陸相)の「まあ1個師団ぐらいなら、いちいち喧しく言わないで現地に任せたらいいではないか」で、作戦命令は追認された。

板垣 征四郎(いたがき・せいしろう)
明治18(1885)～昭和23(1948)岩手県生まれ。陸軍大将。昭和4年、関東軍高級参

▽「関東軍機密作戦日誌」は「鶏ヲ割クニ
　牛刀ヲ以テセンコトヲ欲シタルモノ」
▽「勝つのが当たり前」のような 空気の中
　「ノモンハンの悲劇」の 第2次戦闘が始まった

●6月27日早朝、119機の大編隊でタムスク爆撃
▽奇襲は成功し 撃墜破150機 味方損害4機
▽外蒙領への爆撃は 天皇の大命が 必要だったが
　これも 関東軍の 独断専行だった
▽寺田が 参謀本部に 大戦果を事後報告すると
　稲田正純作戦課長(大佐、のち中将)は いきなり
　「バカ、戦果が何だ」と 怒鳴り付けた

関東軍と参謀本部の感情的対立

稲田とすれば、関東軍の地位を尊重して自発的中止を期待したのに、ぶち壊しだった。辻は手記に「敵か味方か参謀本部。死を賭して決行した大戦果に対して、第一線の心理を無視し、感情を踏み躙って何の参謀本部であろう」

▽関東軍の 参謀本部無視が 激しくなっていく
▽中島(参謀次長)は 午後 磯谷(関東軍参謀長)に 叱責電報
　「事前ニ連絡ナカリシヲ甚タ遺憾ト感シアリ 本問題ハ影響する処極メテ重大ニシテ 貴方限リニ於テ決定セラルヘキ性質ノモノニ非ス 右企図ノ中止方至急御考慮アリ度」

辻は返電した

「現状ノ認識ト手段ニ於テハ貴部ト聊カ其ノ見解ヲ異ニシアルカ如キモ北辺ノ些事ハ当軍ニ依頼シテ安心セラレ度 右依命」

「命により」と、軍司令官の意向で発信されたことになっているが、決済者もなく、辻の独断で発信されたものだった。

参謀たちは、統帥権をどう考えていたのか。外には、統帥権を振りかざし、総理といえども軍の作戦には口出しさせない。内には、勝手に都合のいい解釈をし、中央を欺いてでも事件を拡大させる。下には、軍紀厳正を要求し、「死んでも陣地は守れ」と命令する。軍司令官は参謀の言いなり、ロボットだった。

謀。石原莞爾と満州事変を起こす。13年近衛内閣陸相。平沼内閣にも留任。朝鮮軍司令官など歴任。A級戦犯で刑死

須見連隊長の話

小松原に転属の申告に行くと、まるでお茶でも飲みに行くみたいに、「とにかく行くってもらえばいいんだ」

幼なじみの大内(参謀長)も「どの道、須見さんには金鵄勲章をあげるようにしますよ」遠足に行くような調子。

越境爆撃の経緯

寺田(高級参謀)は第2飛行集団に攻撃命令を出す時、「中央と意思統一が出来ていない」と反対したが、辻や服部は「敵基地を空襲することは、防衛の責任上戦術的手段としては当然であって、その権限は関東軍司令官にある。大命を仰ぐ筋合いではない」

辻は、参謀本部の「不拡大方針」を知っていた。一切内緒で準備を進め、事後承諾させることにしたが、24日夕、中島鉄蔵(参謀次長)から「事件拡大を招く恐れがある」と爆撃の自発的中止、連絡のため参謀を派遣するとの電報が来た。業務連絡に上京した関東参謀が、爆撃計画を洩らしたため、驚いてストップをかけたのだが、参謀本部のミスは総長名ではっきり中止命令を出さなかったこと。辻は「使者が来てからでは爆撃出来なくなる」と、爆撃強行に踏み切ったのだ。

中島　鉄蔵(なかじま・てつぞう)
明治19(1886)～昭和24(1949)山形県生まれ。陸軍中将。参謀本部部長を経て昭和13年参謀次長。ノモンハン事件で不拡大の立場をとった。事件後予備役。太平洋戦争では司政長官としてジャワに赴任、ジャカルタ刑務所で病死した

●参謀本部は、関東軍の任務を制限し、行動を規制しようとした

▽29日 大本営陸軍部命令(大陸命)で
　地上戦闘行動の 国境地区への限定を命じ
　　状況によっては 行なわなくてもいい

「大陸命第320号」

「其ノ所属ニ関シ隣国ト主張ヲ異ニスル地区及兵力ノ使用ニ不便ナル地区ノ兵力ヲ以テスル防衛ハ状況ニ依ッテ行ハサルコトヲ得」

▽また 敵根拠地に対する空中攻撃は
　行なわないよう 指示した

▽関東軍は 爆撃こそ 中止したが
　「越境ソ連軍撃滅」の方針は 変更しなかった

関東軍は6月30日、攻撃命令

第23師団主力を以て、ハルハ河左岸の敵砲兵陣地を撃破する。つまり、外蒙領への越境を認め、その後右岸のソ連軍を背後から攻撃。戦車団(安岡正臣中将指揮)が呼応、右岸の敵を撃滅する。

戦車67台、装甲車14台は日本陸軍始まって以来の大機械化部隊出撃で、小松原(師団長)も参謀も「これだけの大部隊で攻撃すれば、敵は逃げてしまうのじゃないか」 退却を心配して十分な準備、偵察も行なわないまま攻撃へ。

●大雷雨の7月2日夜、ハルハ河渡河作戦が始まった

▽激しい砲撃に阻止され ほとんど 前進できない
　ソ連軍は 日本軍の5倍以上
　戦車186台 装甲車266台を 繰り出してきた

▽日本の戦車は「お豆腐みたいなもの」(須見連隊長)

▽戦車部隊は 砂地に クモの巣のように張られた
　ピアノ線鉄条網に 苦しめられた
　　キャタピラーに絡みつき
　　動けなくなったところを 狙い撃ちされた

▽戦車第3連隊は 連隊長(吉丸清武大佐)が 戦車内で戦死
　戦車13台 装甲車5台が 破壊炎上
　第4連隊も戦車11台 3日間の戦闘で 戦力半減

▽7月10日には「今後に備えるため」の命令で
　戦車団は 戦場を後にし 駐屯地へ引き揚げた

参謀本部の命令はいつも曖昧

「国境不明確地帯で兵力使用に不便な地域」は、明らかにノモンハンのこと。「放っておいてもいい」としたが、「状況に依って」では解釈次第でどうにでもなり、ここははっきり「作戦中止命令」を出すべきだった。

総長が閑院宮で言わば飾りもの。参謀本部を実質的に取り仕切る中島(次長)は中将。関東軍司令官には、強制ではなく、自主性に任せる遠慮が出た。

閑院宮　戴仁親王(かんいんのみや・ことひとしんのう)

慶応1(1876)～昭和31(1956) 伏見宮邦家親王の第16王子。陸軍大将・元帥。第1師団長、近衛師団長を経て昭和6年参謀総長に就任。15年まで在任

日本の戦車

西欧の戦車は、戦車を主兵として歩兵、砲兵をこれに協力させる。機動力のある戦闘集団の中核ににする考えで作られていた。第1次大戦の血みどろの近代戦を経験しなかった日本陸軍は、主兵は相変わらず歩兵。戦車も歩兵の白兵突撃を援護するため敵の機関銃陣地破壊が任務。戦車と戦闘するようには作られていなかった。

戦車で肝心なのは攻撃力、防御力だが、日本の戦車第1号八九式中戦車(皇紀2589年、昭和4年完成)は57ミリ砲の砲身が短いため貫通力が弱く、ＢＴ戦車(ソ連製)に命中しても、簡単に跳ね返された。装甲も17ミリと薄く、ＢＴ戦車の75ミリ砲や対戦車砲にすぐぶち抜かれた。九五式軽戦車(昭和10年採用)は装甲12ミリ、機関銃弾にも耐えられなかった。

スターリンは大戦車戦略構想で、早くから農業用トラクター工業育成に力を入れ、戦時になれば、すぐ戦車工業に代わった。ＢＴ戦車もその一環

本音は「戦車の消耗に耐えられない」

陸軍省は戦車部隊強化のため、ノモンハン事件の最中、7月15日から「少年戦車兵」の募集を始めた。15歳～18歳を対象に、戦車学校(千葉)で2年間教育したが、一期生(150人)の募集に55倍の応募があった。

関東軍も、戦車団を母体に在満戦車部隊を拡充・強化する予定で、兵隊は殺しても戦車を潰すわけにはいかなかった。兵隊は1枚1銭5厘の葉書でいくらでも召集できた。

●戦車戦の失敗で、砲兵戦主体に切り替えたが…

▽新たに砲兵団を編成 7月23日朝
　1万1千発 空前の砲撃で 総攻撃が始まった

▽歩兵部隊が 前進を始めたとたん
　ソ連軍の砲列が 火蓋を切り 前進はストップ

▽大砲 砲弾の数で 次元が違った上
　性能でも 劣っていた

▽砲兵戦2日目で 早くも 弾薬がなくなった
　味方の砲撃が 途絶えたので 歩兵部隊が
　重砲陣地に「あそこを撃ってくれ」と伝令
　「きょうは、もう配給がすみました」

▽関東軍司令部は 弾薬補給は難しく
　「短期決戦は無理」と判断 24日午後
　各部隊に 持久戦態勢のため 陣地構築を指示

●参謀本部は態勢建て直しに8月4日、第6軍を編成

▽軍司令官に 荻洲立平(中将)
　第23師団 第8国境守備隊を 指揮下に入れた

▽本音は 事件の早期終結だった
　「関東軍さえ係争地から引き揚げさせれば、ソ連軍はそれ以上、満州領内に深入りして来ない」

▽中島(参謀次長)は 8月19日 事件処理要綱を上奏した

参謀本部の「事件処理要綱」

「解決には外交交渉を重視し、また交渉が不成立の場合でも、冬期の作戦困難な時期を利用して、第一線兵力を係争地域外に撤収させる考えであります」

として大量生産向きに作られ、車体は雑なものだったが、装甲は厚く、スピードも日本の戦車の2倍もあった。

日本軍で活躍したのは火炎壜

ソ連軍も戦車32台、装甲車35台の損害を出したが、兵隊に「サイダーを飲んだら、空瓶は捨てずに持って行け」と命じたのは、須見連隊長だった。

第1次戦闘で東捜索隊が戦車に追い詰められた時、衛生兵が持っていたアルコール壜を投げ付けたところ戦車が炎上、擱座した。それを耳にした須見が、火炎壜攻撃を思いついた。

ガソリンを詰めて点火し、投げ付けると、エンジンの熱と、日中40度の炎暑で熱くなっている戦車の鉄鋼が面白いように燃えたという。

ただソ連軍は日本軍と違い、すぐ対策を立てた。8月に入ると引火しにくいディーゼル・エンジンにし、戦車の周りには金網を張って火炎壜を跳ね返すようになった。

射程が段違い

	日本	ソ連
75ミリ山砲	8,300メートル	10,700メートル
15センチカノン砲	18,000メートル	30,000メートル

荻洲　立平(おぎす・りゅうへい)

明治17(1884)～昭和24(1949)愛知県生まれ。陸軍中将。台湾軍参謀長、第13師団長を歴任。昭和14年新設の第6軍司令官となり、ノモンハン戦を指揮したが、敗戦の責任を問われ、翌年予備役に

ヒットラー(Adolf Hitler)

1889~1945 ドイツ総統。第1次大戦後ナチ党党首となり昭和8年首相。一党独裁体制を確立。対外侵略を強行し第2次大戦を起こす。ベルリン陥落直前に自殺

▽舞台を すぐ 外交交渉に移し
　関東軍に 撤収命令を出さなかったのか
▽事態は すでに 手遅れだった

●ヨーロッパは、「激動の時代」を迎えていた

反共ドイツと共産主義が握手

スターリンは、ミュンヘン協定に衝撃を受けた。会談に締め出されただけでなく、英仏の弱腰を見せ付けられた。ドイツの軍事圧力も、ソ連の脅威になってきた。「ヒットラーの矛先をかわすため、何かしなければ」— ここに不倶戴天の仇敵同士が、歩み寄る要素があった。

▽ヒットラーは ポーランド侵攻のため
　まず 日本に対して 動いた
▽昭和14年1月6日 平沼騏一郎内閣(前日成立)に
　「防共協定を強化し、日独伊三国同盟を結ぼう」

ドイツの提案

日独防共協定(11年11月26日締結)は共産主義思想を防ぐため、ソ連だけを対象とし、相互援助協定で、武力援助を約束したものではなかった。

それが「締約国の一つが攻撃の対象となりたる場合には、他の締約国はあらゆる使用し得る手段を以て助力と支援を与うる義務を有するものす」対象をソ連以外に広げ、武力援助、参戦義務付けなど、軍事同盟そのものだった。

▽明らかに ポーランド侵攻の場合
　英仏が出てくるのを 牽制する狙いだった

●陸軍は、「三国同盟」に飛び付いた
▽支那事変で 中国に33個師団 全兵力の7割も投入
▽ドイツが 西から ソ連に圧力をかけてくれれば
　ソ連が 極東に向ける兵力も 減るし
　支那事変に 介入してくる心配も なくなる
▽海軍と外務省は 強硬に 反対した
　自動参戦を義務付けた 軍事同盟が
　英仏を対象に入れれば 対米戦争に発展の危険
▽海軍は 米内光政(海相)
　山本五十六(次官) 井上成美(軍務局長)のトリオ

欧州の空を覆うドイツの暗雲

ヒットラーは昭和13年3月にオーストリアを併合すると、8月にはチェコ・スロバキアに触手を延ばしてきた。ドイツ人の住むズデーテン地方を併合しようと、国境に軍隊を集結した。チェコと同盟しているフランスは陸軍部隊を動員、英国も海軍に動員令。

欧州に戦争の緊張が走る中、英首相チェンバレンがミュンヘンに飛び、9月29日、英仏独伊4ヵ国首脳会談が開かれた。チェコ抜きで決定の協定は、ズデーテン割譲というドイツの脅迫に屈したものだったが、市民は「戦争がなくなった」と歓喜した。

しかしチェコを犠牲にした平和は、一時的な幻想であり、「ごまかしの平和」に過ぎなかった。ヒットラーは恫喝外交の勝利に「不戦の約束」を守る気はなく、次の狙いをポーランドに。

チェンバレン(Arthur Chamberlain)
1869～1940 英国の政治家。蔵相を経て昭和12年首相。対独宥和政策に失敗、14年ドイツに対して宣戦布告

平沼　騏一郎(ひらぬま・きいちろう)
慶応3(1867)～昭和27(1952) 岡山県生まれ。検事総長、大審院長、法相を歴任。右翼結社「国本社」を主宰し枢密院副議長時代、ロンドン軍縮条約に反対。昭和11年枢密院議長となり、14年首相就任。A級戦犯で終身刑。仮出所中に病死

米内　光政(よない・みつまさ)
明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て昭和12年林内閣海相。近衛、平沼内閣に留任。15年首相に就任。三国同盟に反対し陸相辞職で総辞職。19年現役に復帰し、小磯、鈴木内閣海相となり終戦に尽力

井上は明快に言っている

「国軍はわが国を守るために存在するのであって、他国の戦争に馳せ参ずるがごときは、国軍の本旨にもとる」

▽海軍省には 連日のように 右翼が押し掛けた
「条約を結べ」と 辞職勧告や斬奸状
▽米内は「最初から一切不動である。
海軍としては何ら譲歩する余地はない」
▽山本は「述志」の遺書を 次官室金庫に
「オレが殺されて、国民が少しでも
考え直してくれりゃあ、それでいいよ」
▽「三国同盟」を 結ぶかどうか
五相会議(首・外・蔵・陸・海)は 7月まで
延々 70数回の 小田原評定を続けた

●ドイツは、ソ連にも「保険」をかけていた
▽英仏と 戦争になった場合
ソ連から 背中を 撃たれないため

独ソの接近

ヒットラーのナチス政権獲得記念日(1月30日)の演説から、「共産主義罵倒」が消えた。スターリンも5月、リトヴィノフ外相を更迭しモロトフを後任にした。リトヴィノフは、ヒットラーが排撃しているユダヤ系で親英仏・反独派。

▽ヨーロッパ情勢は 激しく 展開していた
3月に チェコ・スロバキア解体
4月には アルバニアが イタリアに併合された

「ポーランド進撃を9月1日とする」

ヒットラーは4月3日、国防軍幹部に対して命令した。英仏と戦争になった場合、日本とソ連と、どっちと組んだらいいか、利害得失を計算しながら9月を睨んで計画を進めていった。

▽5月22日 独伊友好同盟条約「鉄鋼同盟」と豪語
ムッソリーニ伊首相は「ヨーロッパの国際関係は、ローマとベルリンを枢軸として展開する」

スターリンの思惑は…

ノモンハンに、ジューコフの要請以上の大兵

山本 五十六(やまもと・いそろく)
明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生まれ。海軍大将。昭和11年海軍次官となり14年連合艦隊長官。開戦劈頭、ハワイ真珠湾攻撃を立案、実行した。前線海軍基地視察中にソロモン諸島上空で米軍機に撃墜され戦死。死後元帥。国葬

井上 成美(いのうえ・しげよし)
明治22(1889)～昭和50(1975)宮城県生まれ。海軍大将。昭和12年軍務局長。第4艦隊長官を経て17年海兵校長となり英語教育を貫く。19年次官に就任、米内海相を助けて終戦に尽力した

山本の「述志」

(昭和14年5月31日) 一死君国に報ずるは素より武人の本懐のみ。豈戦場と銃後とを問はむや。勇戦奮闘戦場の華と散らんは易し。誰か至誠一貫俗論を排して斃(たお)れて已むの難きを知らむ。高遠なる哉君恩、悠久なる哉皇国。思はざる可からず君国百年の計。
一身の栄辱生死、豈論ずる閑あらんや。語に曰く、
丹可磨而不可奪其色、蘭可燔而不可滅其香と。
此身滅す可し、此志奪ふ可からず。

モロトフ(Mikhailovich Molotov)
1890～1986 スターリン側近で昭和5年人民委員会議議長(首相)。14年以来、外相を務めたがスターリンの死で32年解任

ムッソリーニ(Benito Mussolini)
1893～1945 イタリアの政治家。大正10年全国ファシスト党を結成し11年政権を掌握。独裁体制を確立し、昭和11年エチオピア併合。15年連合国に宣戦、18年連合軍シチリア上陸で失脚、監禁。独軍に救出されたが、パルチザンに処刑

力を送り込んだのは、ドイツの肚を読んで「これは極東どころではない。いつでも、ヨーロッパ方面で動き出せる態勢を取っておかねばならぬ。それには、まず日本軍に対して思い切った一撃を加えておく必要がある」

●五相会議が8月8日、1ヵ月ぶりに開かれた
▽板垣(陸相)は「無留保の即時同盟締結」を主張
石渡荘太郎(蔵相)が 米内(海相)に尋ねた
「同盟を結べば、三国が英米仏ソを相手にして戦争をする場合を考えなければならない。その際八割までが海軍の戦争になると思われるが、我に勝算がありますか」

米内は即座に否定した

「勝てる見込みはありません。大体、日本の海軍は、米英を向こうに回して戦争をするように建造されておりません。独伊の海軍に至っては問題になりません」

▽五相会議の結論は お預けとなった
▽板垣は 陸相辞職の脅しで 同盟締結へ
10日 軍務局長を オット大使に派遣し
「辞職・倒閣」の決意を 伝えた
▽オットは 直ちに 本国政府に打電
日本国内に なお 反独勢力が 根強いことを
ヒットラーに 知らせることになった

●ヒットラーは「三国同盟」を諦め、ソ連一本に
▽エサは ポーランド分割
▽モロトフも 8月19日「独ソ不可侵協定」を提案
▽21日夕 スターリンから電報
「協定交渉のため、23日のリッベントロップ外相のモスクワ訪問に同意する」
▽ヒットラーは「これで世界は予の手に入った！」

●ソ連軍総攻撃は8月20日早朝、猛烈な砲爆撃で
▽5万7千の大軍が 戦車498台 装甲車385台を先頭に
火砲・迫撃砲542門 航空機515機に 援護され
一斉に 襲いかかってきた

東京では…

7月に入ると、「独ソ間で何事か進行しているようだ」こんな噂が囁かれた。大島浩駐独大使も、リッベントロップ外相から何度か独ソ接近をほのめかされたが、東京では「そんな事があるはずがない」先入観もあり、「ドイツが三国同盟を結ぶため、わざとそんな情報を流しているのだ」

大島 浩(おおしま・ひろし)
明治19(1886)～昭和50(1975)岐阜県生まれ。陸軍中将。昭和9年駐独武官。13年大使。独ソ不可侵条約で辞任したが、15年再び大使となり、三国同盟を推進。A級戦犯で終身禁固刑。30年出所

リッベントロップ(Ribbentrop)
1893～1946 ドイツ・ナチ党外交責任者となり、昭和11年日独防共協定締結。13年外相就任。戦後、連合国裁判で絞首刑

石渡 荘太郎(いしわた・そうたろう)
明治24(1891)～昭和25(1950)東京生まれ。昭和12年大蔵次官となり、14年平沼内閣蔵相。米内内閣書記官長。19年東条改造内閣蔵相。小磯内閣にも留任し、20年宮内相。敗戦前後の混乱に対処した

板垣の独大使宛口上書

「陸軍は8月8日の五相会議に於て同盟のために奮闘せるも、何らの進歩を示さざりき。陸軍大臣は最後の手段として辞職を賭すべく決意しおり…当初に於ては強烈なる後退を生ずるやも知れず。然れども辞職を決意する以外可能なる方法なし。右決定は8月15日に行なわれる予定なり」

20日というタイミングは

スターリンは、ドイツとの協定締結

▽迎え撃つ日本軍は 北のフイ高地から
南のノロ高地の 30キロにかけて 3万足らず
火砲100門程度 戦車 装甲車は なかった
▽陣地も 簡単な散兵壕を 掘っただけ
鉄条網もなければ ピアノ線も埋めてない
戦闘正面が広過ぎ 陣地の間隔が 4キロから5キロ
▽「相手はウンカのようにやって来て、陣地の周りは全て戦車と装甲車。鉄の蓋をされたようなもの」
▽各陣地は 簡単に 分断包囲され 孤立していった

参謀は、何を学び、何を教訓としたのか

陣地構築の現場を、その目で見た参謀がいたのだろうか。服部(作戦主任参謀)は「関東軍機密作戦日誌」に「我の最も好機に敵が攻勢に転じたるものにして、この機会に於て敵を捕捉し得るものと信じたり」 関東軍報道班長も「勝算我にあり」と、新聞談話を発表した。

情報課の参謀が「陣地と陣地の間隔が開き過ぎている」と懸念を指摘したところ、作戦課参謀は「敵を誘い込み包囲殲滅するため、わざと開けてあるのだ」

陸軍の現実無視、ただ強がるだけの弊害は、敗戦までついに改められることはなかった。

●21日夜11時過ぎ、国営放送(ベルリン)は衝撃のニュース
▽突然 音楽番組を 中断して
「独ソ不可侵条約が23日に締結される」
▽日本では22日朝 板垣が 同盟締結に
平沼首相に 粘っている時だった
▽防共協定そのものが 全く 無意味なものに
▽平沼内閣は 8月28日 総辞職した

●ノモンハンでは、末期的な戦闘が続いていた

第一線部隊は勇戦奮闘したが…

フイ高地で捜索第23連隊(井置栄一中佐)が、ソ連軍が「英雄的」と称賛したほど、頑張っていたが、ソ連軍が陣地を飛び越して、先へ進んで行く。井置は「尽くすべきは尽くした。フイ高地にもはや戦略的価値はなくなった」 25日午前2時過ぎ脱出命令を出したが、師団命令は「陣地死までに日本軍との戦闘にケリをつける決意を固めた。ドイツとの交渉で、何の弱みもない立場を必要とした。

リッペントロップが「何なら日ソ間の調停をしてもいい」と言うと、グルジア出身のスターリンは、「私はアジア人だ。アジアとの付き合いは、私の方がよく知っている」と断った。

戦闘詳報は「凄まじい」の一語

「砲弾雨の如く、百雷一時に落つるが如く、黒烟濛々として呎尺を弁ぜず」

「砲弾の落下は概ね1分間に120発を算し、又陣地1平方米に1発の割合にして、散兵壕は跡形もなく崩壊し平地同様となり、所在の散兵は飛散す」

重傷を負った小林恒一郎少将(第23師団歩兵団長)は、日記に「敵の砲撃を喰ひ為に各隊ばらばらとなり、師団も各隊も皆呆然たり。司令部職員皆無にして馬は離れ、自動車の行方は不明。如何とも手の下し様なし。此位情なかりし事はなし」

ドイツの重大な裏切りだった

防共協定は「相互の同意なくしてソ連との間に、この協定の精神と両立しない一切の政治協定を結ばない」

平沼内閣総辞職の声明

独ソ不可侵条約に依り、欧州の天地は複雑怪奇なる新情勢が生じたので、我が方はこれに鑑み、従来準備し来った政策はこれを打切り、更に別途の政策樹立を必要とすることに至りました…輔弼の責任に鑑み、洵に恐懼に堪へませぬ。臣子の分としてこの上現職に留まりますことは聖恩に狎るるの惧れがあります。

歩兵第71連隊の最期

2人の連隊長が負傷し、森田徹大佐(8月

守」陣地放棄で拳銃自決を強要された。
ノロ高地の第8国境守備隊(長谷部理歓大佐)は、26日夜には弾丸を撃ち尽くし、食料は3日前、水も2日前からなくなった。ソ連軍機関銃742挺に対し83挺。長谷部は「死守に固執して全滅を待つより、後退して他の部隊と合流、態勢を建て直そう」と撤退命令 やはり自決させられた。

▽第6軍司令部は 29日午前8時 全軍に撤退命令
「速やかに敵線を突破し、
ノモンハンに向かい前進すべし」
▽小松原(師団長)以下2千人が 脱出できたのは
ソ蒙軍が 彼ら主張の国境線で 停止したから

●外務省は8月28日、駐ソ大使に外交交渉を訓令
▽参謀本部も 30日 戦闘終結を決断 関東軍に
「勉メテ小ナル兵力ヲ以テ持久ヲ策スヘシ」
関東軍は 作戦中止要求と取らず 攻勢準備
▽9月3日 再び「作戦中止」の大命
▽停戦協定は 9月16日 モスクワで調印された
▽ソ連軍は 翌17日 東部ポーランドへ 進撃開始
ポーランドとは不可侵条約 これも 背信行為
▽遺体収容作業は 16日から
死屍累々「ああ、みんな死んでしまったなあ」
▽1年後 合意した国境線は ほぼ 外蒙側主張の線

●「罪万死に値する」幹部、参謀の処分は軽かった
▽植田 磯谷 荻洲 小松原が 予備役に
服部も辻も 一時的に 閑職に飛ばされただけ
▽辻は手記に「省みて戦力、統帥の補佐を誤り、数千将兵の屍を砂漠に空しく曝した罪を思う時とき断腸切々」 しかし その末尾は「戦争は
敗けたと感じたものが、敗けたのである」
▽服部は 日米開戦前 作戦課長 辻も作戦班長に
▽陸軍の特別研究委員会は 報告書を纏めた

「ノモンハン事件報告書」の結論

「国軍伝統ノ精神威力ヲ益々拡充スルト共ニ低水準ニアル我カ火力戦能力ヲ速カニ向上セシムルニ在リ」 (昭和15年1月)

8日戦死)も26日戦死、東宗治中佐が指揮を取っていた。敵中に孤立し、撤退命令が届かず、30日夕には弾丸もなくなった。
東は負傷していた当番兵に「お前は出来る限り生き延び、状況を司令部に報告せよ。そして、後世にわが連隊の最期を伝えよ」と命じると、「東中佐、四十八歳、突撃」と叫んで、残った40数人を率いて敵陣に飛び込み、全員が戦死した。
東は昭和13年7月に召集されるまで山口県防府市の中学で配属将校をしており、温厚で評判のいい教官だった。山口県出身者の多い71連隊は、4,551人のうち戦死・戦傷4,254人、損耗率93%。第23師団でも、最も大きな犠牲を出した。

作戦中止の「大陸命」

一、情勢ニ鑑ミ大本営ハ爾今「ノモンハン」方面国境事件ノ自主的終結ヲ企図ス
二、関東軍司令官ハ「ノモンハン」方面ニ於ケル攻勢作戦ヲ中止スヘシ

ソ連・外蒙軍の損害

1993年、秘密指定解除で公開されたソ連側資料によると、ソ連軍の戦死・廃疾7,974、戦傷15,521、戦病701で計23,926人。外蒙軍戦死165、戦傷401。
この資料では日本軍の戦死18,800、戦傷25,900。昭和41年のノモンハン事件戦没者慰霊祭(靖国神社)で発表された戦没者1万8千人余りと一致。

捕虜将校の特設軍法会議

非公開で行なわれ、立ち会った憲兵の話では、裁判官は終了後、将校に拳銃を渡して何も言わずにサッと引き揚げた。その直後、憲兵も近寄るなという命令が出て、間もなく、ピストルの発射音が響いたという。